
私の折々の歌

夢野ユーマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の折々の歌

【Nコード】

N2576S

【作者名】

夢野ユーマ

【あらすじ】

私なりに「折々の歌」を書くことに挑戦しました。

4月1・2・3日（前書き）

文学がお好きな方ならご存知のように毎日の新聞には時節に合った歌と簡単な歌が載っています。そのさきがけが大岡信先生が朝日新聞に連載を続けてらっしゃる「折々の歌」です。私も私なりに修行として挑戦してみます。一日分は短くて載せられなかったもので、三日分をひとまとまりにしました。お気軽にお読み下さい。

4月1・2・3日

ずぶ濡れのラガー走るを見下ろせり未来に向かふもの皆奔る（塚本邦雄）

たいへんな大災害が起きた。こんなことを言ふのは不適切かも知れないが、第二次大戦敗北以来の国難であらう。だが、暗鬱な作風の塚本邦雄でさへ、掲出歌のやうに力強く明るい歌を詠んでゐた。まだまだ私たちも負ける訳にはいかない。

明け暮れに昔恋しき心もて生くる世もはた夢の浮橋（与謝野晶子）

すべからく偉大な芸術家は古典主義であるべきである。久世光彦先生の「早く昔になればいい」は名言である。しかし大震災があり、私たちは本当にある程度の回帰を強いられるかも知れない。恋しい昔は便利で愚かだった昔かも知れない。まことこの世は夢の浮橋である。

君見ずば心地死ぬべし寢室の桜あまりに白き黄昏（北原白秋）

今年は春が遅いやうな気がする。私の住む大垣では花見祭をやつてゐたがソメイヨシノはまだ満開ではない。私の住む大垣は大垣城の堀が水門川といふ川になつてゐて、屋形船が下り、人々が桜を眺めてゐた。掲出歌を詠んだ北原白秋の故郷も同じ水路の街柳川である。白秋も私もロマンの香りを吸つて生きてきた。

4月4・5・6日

紅のチンタ流れる春の水（西鶴）

明治維新までカレンダーと季節は一致してゐた。西鶴の句はお正月にチンタ（オランダ語で赤ワイン）を飲んだといふだけの歌である。だがウキウキした感じがする。大震災の被災地は酒造も盛んで「お花見控えないで」と言つてゐるそう。チンタではなく東北のお酒を持つて桜を見に行かうか。

めちやくちやの世になれとかつて叫びしがその世来たりて我を泣かしむ（前川佐美雄）

衝撃的な歌である。前川佐美雄は戦前、貴族階級でありながら、「心の花」といふ団体に反旗を翻し、プロレタリア文学者を交えた「日本歌人」といふ団体を作つたのである。そんな佐美雄も敗戦後の混乱にこんな歌を詠んでゐる。しかし佐美雄はしぶとく生き残り、塚本邦雄、山中智恵子、前登志雄らを育てた。ただ終生、故郷の奈良を離れなかつた。

君亡きか若狭の登美子しらたまのあたは君さへ砕けはつるか（与謝
野鉄幹）

近代以降に詠まれた挽歌でこれほど力強いものを他に知らない。与謝野鉄幹が不倫相手の山川登美子が亡くなった時に詠んだ慟哭の歌である。これ以外の鉄幹の歌は上手くないので不思議。こんな歌を詠まれて晶子もどんな複雑な気持ちだったのか？それはそれとして大震災の一人一人の被害者に遺族の方はこんな気持ちを持つてゐるでしょう。

4月7・8・9日

咲けば散る咲かねば恋し山桜思ひ絶えせぬ花の上かな（中務）

この歌は桜のことを歌つてゐるやうで、実は中務が愛娘が亡くなつた時に詠んだ親の愛と哀しみの歌である。人間の歴史はさういふ愛と哀しみの歴史だつた。私たちは最近、さういふ哀しみを制圧したといふおごりがあつたかもしれない。しかしそれは間違いだつた。しかし愛は残つてゐる。必ず復興出来る。

さまざまのこと思ひ出す桜かな（芭蕉）

あまりにも有名な句である。芭蕉が敬愛し、養育した伊賀の若殿藤堂蟬吟が亡くなつた時、追善に集まつた人々に披露した畢生の傑作であつた。しかし、この句を読む私たちが思ひ出すのは美しく楽しい思い出もよい。満開の桜の中でこの句を口ずさみ、涙があふれて止まらなかつた。

迷いなき生などはなし我が眼おとろうる日の声凜とせよ（馬場あき子）

私たちは大震災以来、迷い、不安、恐怖、混乱の中にゐる。しかしそれも人間のあるがままの姿だったと気づかされたに過ぎない。その中で凜として生きる。それこそがまさに人間らしさなのだらう。明日も凜としてゐられるだらうか？

4月10・11・12日

人間を深く愛する神ありてもしもの言はば我のごとけむ（釈超空）

不思議な歌である。「人間を深く愛する神ありて」といふ言い回しは本当の神は人間を愛してゐないと告発してゐるやうな感じすらする。超空は最愛の息子を硫黄島で戦死させてゐた。そしてそんな超空は人間を愛する神があるならば自分のやうだと歌つてゐる。最愛の息子を失つた超空はむしろそんな悲劇をもう誰にも味わわせたくないといふ大きな愛を歌つた。そのことを思ふと胸が張り裂ける。

命あらばまたも会ひ見む春なれど忍びがたくて過ぐる今日かな（後
中書王）

後中書王とは醍醐帝の皇子で中務卿だつた具平親王のことである。後中書王の学識や教養は紫式部や藤原公任も一目置く程だつた。後鳥羽院も時代不同歌合の最後の方にこの歌を据えている。しかしこの歌が本当に傑作だと分かつたのは大震災の後だつた。この歌は桜を見ることが出来る命を讃えてゐる。そしてそのはかなさをも見つめてゐる。

理解より愛は生まれ来^く我らみな黄金の鍵の言葉持つなり（窪田空穂）

日本人は言^{コト}霊^{ダマ}と言つて、言葉そのものを信仰する文明を持つてゐた。その信仰の名残と言はなくても言葉は人を生かすことも殺すことも出来る。言葉で傷つけられた人を救ふのもまた愛の言葉かも知れない。空穂は言葉を黄金の鍵と表現した。

4月13・14・15日

ほのぼのと春こそ空に来にけらし天香具山霞たなびく（後鳥羽院）

おおらかで美しい歌である。一昨日から昨日にかけてまた巨大余震が続き、日本は平和と思へないかもしれない。しかし後鳥羽院が歌ったおおらかで美しく悠々とした景色こそが日本のあるがままの美しさである。

カーテンの向こうは多分雨だけど雲雀がさえずるようなフェラチオ（林あり）

おおらかで美しい歌である。カーテンの向かうは実際に雨なのだろう。しかしそれはいろいろな不幸を象徴してあるやうな気もする。それでも愛し合ふ恋人たちの世界は幸福で平和なのである。一切の虚飾を捨て去った愛の風景がここにはある。

三つ食べば葉三片や桜餅（高浜虚子）

さすが文豪の虚子。桜餅を食べる時、上品に葉っぱをはがしてゐたのである。私は野人だから葉っぱも食べちゃう。塩漬けの葉っぱと甘い桜餅が混ざるとまた美味しいのである。どんな不幸でも私たちは美味しいものを食べて生きて、乗り切っていく。

4月16・17・18日

桜花命いっぱいに咲くからに命をかけて我眺めたり（岡本かの子）

かの子は小説、歌、仏教研究などあらゆることにエネルギーを注いだ。夫は岡本一平。息子は岡本太郎。桜が命いっぱいに咲いてゐるといふのは凡人でも抱ける感想だが、「私はそれを命がけで見る」と言ひ切つてしまふとはやはり天才としか言ひやうがない。その言葉に掛け値がなく、凄みが漂つてゐる。流石である。

この世には忘れぬ春の面影よ朧月夜の花の光に（式子内親王）

誰にも忘れられぬ春の思ひ出がある。恋の思ひ出かもしれない。家族の思ひ出かもしれない。仕事の思ひ出かもしれない。それは朧月夜の中に光る桜の花と共にあると式子内親王は詠はれた。誰の心にもそんな思ひ出がある。そのことが愛しくて、哀しい。

幾億の命の果てに生まれたる二つの心そと並びけり（柳原白蓮）

私たちは幾億年の昔に生まれた命からずっと続いてゐるボタンを受け取つてこの世にゐる。さうして誰かと出会ひ、絆や縁えにしを感じる。それは奇跡的なことである。柳原白蓮は柳原伯爵家に生まれ、富豪伊藤伝右衛門と結婚し、筑紫の女王と讃へられたが若い東大生宮崎龍介と駆け落ちし、愛を貫いた。愛、絆、奇跡を信じたのである。これを書いてゐる私の心と読んで下さるあなたの心がそと並ぶことを思ふと涙があふれる。

4月19・20・21日

「はなびら」と点字をなぞるああこれは桜の可能性が大きい（笹井宏之）

笹井さんは数年前20代半ばの若さで心臓の病気のためお亡くなりになった。しかし残された歌の天才的な明るさと軽やかさはだうであらう！一人一人の人間は限りある存在だが、未来に作品といふ形で記憶を手渡す。大震災でお亡くなりになった一人一人もご遺族の中で記憶は生きてゐる。

春の雨降れる宵なりあたたかう君に流るる我が涙かな（平野万里）

当てずつぱうの意見だが男は女より弱い気がする。この歌を詠んだ平野万里は男である。与謝野晶子の弟子で斉藤茂吉に短歌の魅力を教へた人であつた。歴史とはさういふ不思議な縁の糸が織りなすタペストリーである。

血と雨に＼シャツ濡れてゐる。無援、一人への愛、美しくする（岸上大作）

偽物がまかり通つてゐる世の中である。だが私は言はなければいけない。偽物は偽物だと。岸上大作のやうに孤立無援である。誰も助けてくれない。それでも本物を知つてゐる私の使命として私は戦ふ。負けない。

4月22・23・24日

ふるさをいづれの春か行きて見むうらやましきは帰る雁がね（光源氏）

いづれの春になつたらふるさに帰れるのだらう。いや帰ることは出来ぬのだ。北に帰る雁がうらやましい。一千年前の愛の英雄の喧きは21世紀の春の私たちの悲しみと響きあつてゐる。

花はなほ春をもわくや時知らぬ身のみものうきころのながめを（伏見院）

こんなに悲しい時も花は咲くべき春が分かるのだらうか？私は憂ひに沈み、時の流れも分らない。伏見院が父帝後深草院の崩御を悼む歌である。帝王もまた人間であり、悲しみは普遍である。

散り散らず聞かまほしきをふるさとの花見て帰る人も会はなむ（伊勢）

散つたか散らないか聞きたい。ふるさとの花を見て帰る人が私に会
ひに来て欲しい。伊勢の絶唱である。東海地方は寒冷な大垣も葉桜
だが東北の桜は絢爛と咲いてゐるだらうか？

4月25・26・27日

なぐさむる君もありとは思へどもなほ夕暮はものぞ悲しき（和泉式部）

今日は尾崎豊さんの命日だった。ところで和泉式部は冷泉帝の皇子師宮に愛される幸福の絶頂でこんな歌を呟いた。この歌は人間存在の根源にある悲しみや孤独を見つめており、恐ろしいほどである。千年前の日本人は現代文学でも表現の難しい人間の根源を見つめてゐた。

池水は濁りににこり藤なみの影もうつらず雨ふりしきる（伊藤左千夫）

桜は終はつたけれど藤の花が咲いてゐる。と言つても私の住んでゐる大垣は藤はまだ咲いてゐない。春日井に仕事に出かけてゐる時に見かけた。左千夫は藤の名所亀戸天神でこの歌を詠んだ。後年、太宰治は遺書にこの歌を書いたが何を考えてゐたのか？

定住の家を持たねば朝に夜にシシリイの薔薇やマジヨルカの花（斎藤史）

史の父・斎藤劉將軍は2・26事件に巻き込まれ、史自身、事実上の流罪として長野県に行かされ、二次大戦の後も東京に帰ることを潔しとしなかった。しかしそんな宿命をも軽やかに美しく詠み下す強さを史は持つてゐた。彼女の心の中には美しい花が咲き誇つてゐた。

4月28・29・30日

明治大正昭和三代を夢とせば楽しき夢かわが見たりけり（斎藤劉）

斎藤史の父、劉（本当はこの字にさんずいがつく）の歌である。「
楽しき夢」と歌つてゐるが劉の生涯はむしろ激動、政争に巻き込ま
れた苦しみに満ちたものだつた。それを知つてこの歌が本当に持つ
てゐる苦みを味わふと深い感慨がある。明日は昭和の日である。

くれなゐのしだれざくらの大池にかけをうつして春ゆたかなり（昭
和帝）

今日は昭和の日。昭和とは激動の時代だつた。すさまじい大戦があ
りおびただしい犠牲者が出た。しかし戦後、オリンピックや万博も
あり、我が国は世界有数の大国となつた。その御代を振り返つての
帝王の感慨である。繁栄と平和を謳歌してゐる。おおらかな歌であ
る。

美貌なる昭和と誰か呟けり戦後六十年ののち愚かにて（石田比呂志）

「昭和とはなかなかいい時代だったんだよ。貧しかったけど、みんな元気だった」そんな発言に石田比呂志は強い怒りを感じてゐる。昭和初期の大戦で信じられないほどの犠牲者が出た。また高度経済成長のかけでも泣いてゐる人がたくさんゐた。それを美しい言葉でごまかすな。石田比呂志は終生、常に権力や強者への怒りを持つてゐた。そして大震災により私たちも戦後の虚妄を悟った。

5月1・2・3日

君と在るかかる夕暮れ茜さす歴史の淡き読点として（佐伯裕子）

佐伯裕子はA級戦犯として処刑された土肥原賢二將軍の孫娘として歌壇の注目を集める存在だった。掲出歌は彼女の歴史意識と愛する人への想ひが交錯して生まれた優しいしらべの歌である。この君は恋愛を超えた全ての人への祈りのやうである。私たちみな互ひに歴史の中に君と在る喜びをかみしめてゐる。

人をそしる心をすて豆の皮むく（尾崎放哉）

放哉は東大を卒業し、大企業に勤めながら、関東大震災にひどくショックを受け、仏教と自由律俳句に打ち込んだ。そんな放哉ですら掲出歌のやうな思いを時に抑へかねたのである。こんな句にもふと立ち止まらされる。大震災のあつた春も終はらうとしてゐる。

虹の根に雫なく雨の晴れ間かな（高井几董）

ゴオルデンウイクである。世情は決して明るくないし、天気もあまりよくない。しかし雨の後には虹が出るだらう。その根元には宝物が埋まつてゐるといふ言ひ伝へを江戸時代の俳人は知つてゐたのだらうか？高井几董は与謝蕪村の弟子である。

5月4・5・6日

夏近きこの天と地の黎明を見よたおやかに聞けるジュピター（永井陽子）

このジュピターはモオツアルトかホルストか友人と言ひ争つたことがある。平原綾香のおかげでホルストが優勢かもしれないが、私はたおやかといふからにはモオツアルトだと確信する。永井陽子先生が亡くなられたのは11年前。48歳だった。まだ信じられない。

花は根に鳥は古巢に帰るなり春のとまりを知る人ぞなき（崇徳院）

「和漢朗詠集」の中に「春が終はると花びらは根つこに、鳥は古巢に帰る」といふ漢詩がある。崇徳院はその言ひ回しをさらりと受けとめ、「その春はどこに行くのでせう？」と清々しく歌った。今年の春も終はる。万感の想ひと共に。

今日もまた青葉のさくら雪と降る山路超えてや夏の来ぬらむ（正徹）

NHKラジオでアナウンサーが話してゐたが春や秋は最近、短くなり、夏と冬が長くなつた気がするとのこと。私もそんな気がする。今日は立夏。正徹は中世最大の歌人である。さくらの青葉が雪のやうに降り注ぎ夏が来ると歌ふ。豪快で明るい。そんな季節を私も願つてゐる。

5月7・8・9日

大工町寺町米町仏町老母買う町あらずやつばめよ（寺山修司）

寺山修司の文学にとつて家族は最高に大事な主題だった。いろんな町があるがどんな町に行つても母、家族は買ふことが出来ない。愛が欲しい。そんなギリギリした感情がほとばしつてゐる。寺山修司は「時には母のない子のように」など屈折した表現も使いつつ、全ての作品の主題は家族への純粋な愛であつた。明日は母の日。

父母が頭かき撫で幸あれと言ひし言葉ぜ忘れかねつる（詠み人知らず）

「万葉集」の東国の防人の歌である。そのため細部がなまつてゐる。しかしそこがいい。一切の虚飾のないこの一首は人間の普遍的な愛を余すところなく描いてゐる。この一首を思ふと涙があふれる。今日は母の日。

世の中を憂しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば）

山上憶良
(

この「やさし」は現代語の優しいではなく「やせるほどつらい」といふ意味である。それでも鳥ではないのだから、この世から飛び立つて逃げることは出来ない。人間の悲しみは千年を越えて普遍的である。また山上憶良は民衆を思ひやつてこの歌を詠んだとされるが、本人の悲しみにもじみ出てゐる。そこが胸を打つ。

5月10・11・12日

うちしめりあやめぞ香るほととぎす鳴くや五月の雨の夕暮れ（九条良経）

時鳥は夏の鳥だが、古代中国の神話では望帝といふ人物の魂が化身した神秘的な鳥と信仰された。そのため、さまざまな文学や古代日本の和歌にもあしらはれたのである。九条良経の歌では五月雨の中に咲くあやめの花にほととぎすがあしらはれてゐる。国民的に有名な傑作である。華麗で美しい。

昔思ふ草の庵の夜の雨に涙な添へそ山時鳥（藤原俊成）

「蘭省花時錦帳下・廬山雨夜草庵中」白楽天の有名な詩をもとに俊成はほととぎすをあしらつて切々とした調子に仕上げた。雨はやまない。大震災から2ヶ月。私も雨の草庵で昔を思ひ、悲しみをかみしめてゐる。

ほととぎす五月水無月わきかねてやすらふ声ぞ空に聞こゆる（源国

信)

だうしたことが雨がやまない。掲出歌のやうにほととぎすも五月か
水無月か分からなくなりさうだ。今年はやはり晴れやかな初夏とは
行かない。世間、人心、動揺してゐる。雨はいつ止むのか？悲しみ
の声が空に満ちてゐる。

5月13・14・15日

我が歌は拙かれども我の歌、他人ならぬこの我の歌（中島敦）

空がやつと晴れ渡った。生徒は中島敦の「山月記」を勉強してゐる。ひ弱な感じの写真が有名だが、掲出歌のやうに力強い歌も詠んでゐる。中島敦は浪漫を求める情熱を隠し持ってゐた。だから傑作を残せたのだらう。

青林檎与えしことを唯一の積極として別れ来にけり（河野裕子）

爽やかな休日。美術館を休憩時間に廻る。昨年亡くなられた河野裕子先生の若い時の傑作が掲出歌である。かういふシヤイな子は昔も今もいるだらう。そして私はさういふ子が何となく好きである。

ためらいもなく花季となる黄薔薇何を怖れつつ我は生き来し（尾崎左永子）

美輪明宏さんがエディット・ピアフの生涯を演じる「愛の讃歌」を
拝見した。感動で涙がとめどなくあふれる。愛の力にふれ、私も活
性化された気がする。大震災以来、何を怖れてきたのだらう。もつ
と力強く生きる。さう思った。愛を信じて生きるのだ。

5月16・17・18日

死なばやと何思ふらむのちの世も恋は世に憂きこととこそ聞け（西行）

死にたいと何と愚かなことを思つたのだらう。来世もまた激しい恋の苦しみはあるのに。西行は花鳥風月を愛した人畜無害な坊主などではなかつた。生まれ変はり、死に変はりしても激しい恋をすると歌ふ危険な愛を隠し持つてゐた。だからこそ人々の魂を震はせる歌が詠めたのだらう。

早実の斎藤佑樹をさへぎりてレヴィ・ストロースの野太き声す（岡井隆）

面白い歌だ。多分、岡井先生は斎藤佑樹の試合を見ながら、リイヴアイ・シユトラウスの本を読んで、本の方に引き込まれたのだらう。今日からプロ野球交流戦。日本に元氣と希望を。文学界も頑張る。

夏は来ぬ相模の海の南風に我が瞳燃ゆ我が心燃ゆ（吉井勇）

夏だなあ。オウブンカフェでシャンパンを飲んだ。吉井勇伯爵も夏と酒とロマンをこよなく愛した。ロマン派とは現実を理想に近づけやうとする心である。私たちがみんながロマン派になれば良い。

5月19・20・21日

サバンの象のうんこよ聞いてくれ怖い切ないだるいさみしい（穂村弘）

詩の初心者がやつてしまふことがある。それは感情をあらはに放出してしまふことである。だから普通の詩人はさういふあらはな言葉を避ける。しかし、時々、歴史の中にはな言葉で詩が書けてしまふ天才が現れる。和泉式部や与謝野晶子、そして穂村弘さんなどである。掲出歌はただあらはな感情だけなのに美事な歌になつてゐる。天性の詩人なのだらう。

失恋の我をしばらく刑に処すアイスクリーム断ちという刑（村木道彦）

あら、困つた。アイスクリームを食べられなくなつたら困る。5月とは思へない暑い日が多いので。村木道彦は俵万智らに先駆け新しい歌風を作つた人だつた。草食といふ言葉はなかつたがさういふ人はいたのだ。

光太郎智恵子はたぐひなき夢をきづきてむかしここに住みにき（高村光太郎）

昭和16年の今日、第1回帝国芸術院賞（現在は日本芸術院賞）が高村光太郎に贈られた。しかし光太郎にとつて大事なのは勲章や名誉ではなく、智恵子との愛の思ひ出を歌ふことだけだった。だからこそ光太郎の作品は人の魂を動かす本物である。初夏の土曜日、そのことを思ふ。

5月22・23・24日

市中はものの匂ひや夏の月（野沢凡兆）

雨が朝から降つてゐたが夕方になり、街は初夏の優しい光に包まれた。掲出句は日本国民の夏の愛唱歌で、めつたに他人を誉めない太宰治もこの句を絶賛してゐる。夏の活気がいきいきと伝わってくる。絶唱であらう。

「ふたたび」と「決して」の間安らかに夜の船は出る僕を奏でて（井辻朱美）

感情をあらはに詩を作るのも天才なら、意味を消し去つて、美しい言葉だけを積み重ね、意味不明になるか、美しい歌になるかギリギリのところを歩むのもカッコいい詩人である。井辻朱美さんは幻想文学の研究や翻訳も手がけてゐる女流歌人である。

生きるとは手をのばすこと幼子の手がプーさんの鼻をつかめり（俵万智）

大震災前だつたら私はかういふ生命の讃歌を選ばなかつただらう。
だいたい折々の歌自体連載する気もなかつただらう。しかし大震災
をきつかけに私は生命を愛しくますます思ふやうになつた。生きや
うと考えてゐる。それが私なりの追悼である。全ての人々の心に生
きる喜びが戻りますやうに。

5月25・26・27日

美しい薔薇さはつてみる、つやつやとつめたかった。薔薇はいきてる。（山川弥千枝）

名古屋の鶴舞公園に薔薇が真盛りになり、見に行つた。薔薇のお花見。薔薇の歌を探したが女流歌人は意外と薔薇を歌つてゐない。例外が15歳で亡くなつた昭和初期の歌人山川弥千枝だつた。弥千枝は「薔薇は生きてる」一冊を残し、文学の歴史に名を刻んだ。死因は結核である。

鮎鮎や彦根の城に雲かかる（与謝蕪村）

元氣そのものの祖父母が老人会の旅行のお土産に押し寿司をくれたが私は生憎押し寿司が苦手なのである。今日は関西が梅雨入りした。掲出句は華麗な道具立てを好む蕪村にしては珍しい生活の香りがある。

夕立の雲も残らず空晴れてすだれをのぼる宵の月影（永福門院）

永福門院は伏見天皇の皇后であり、和泉式部、式子内親王、与謝野晶子などに匹敵する偉大な女性文学者であつた。しかしその作風は理知的で日本の文学史の中で異質である。今日、全国的に梅雨入り。夏の夜、雨上がりの月を待つ梅雨明けを早くも待つてゐる。

5月28・29・30・31日

かそかなるきのふの憂ひ尽きざるも原いちめんに漂ふ紫紺（春日井建）

雨、雨。でも雨にかきつばたは映える。掲出歌の一句一句を注意深く見て欲しい。「か・き・つ・ば・た」といふ言葉遊びになっている。日本人はかういふ言葉遊びで生きる切なさを慰めてきた。遊びは人生といふ悲しみの海を渡る船である。

夢さめし神はもながく裾曳きてそのいとし子の子となりたまふ（水原紫苑）

ひどい雨のうへ、走る車にひどく水をひっかけられた。そんなツイてない日はいつそ、空想の美しい世界を築き上げる歌人に親しむ方がいいかもしれない。水原紫苑さんの歌の意味はよく分からない。ただ美しい言葉を楽しむのである。

くれなゐのちしほのまふり山の端に日の入る時の空にぞありける（源実朝）

「ちしほのまふり」とは千回も染めた鮮やかな布のことだが「くれなゐ」といふ言葉は血を連想させる。まして右大臣就任の幸福の絶頂に、母親に暗殺された悲劇の天才の絶唱であり、異様な衝撃を読むものに与へる。今日は梅雨の晴れ間だった。鮮やなくなれなゐの夕焼け。

遺棄死体数百といひ数千といふ命をふたつ持ちしもの無し（土岐善麿）

政治に怒りを感じる。まだ行方不明の方、見つかつてゐない亡骸が何千とあるのに中央政界は権力闘争に明け暮れ、政党政治は崩壊してゐる。掲出歌を第二次大戦中に発表した土岐善麿は軍により文学者生命を抹殺された。しかし怒りの歌は歴史の中から抹殺することはない。

6月1・2・3日

世のことをつくづく思ふ夕まぐれ鐘の音して雨そそぐなり（大正帝）

ご政道のことは考へたくない。無学無教養な私に分かる術もない。しかし内閣不信任案が国会に提出され、我が国の政党政治は崩壊した。大震災の被災者はいまだ避難し、たくさんの方々がいまだに行方不明である。怒りを感じる。復興や救援が先ではないのか？冷たい雨が降る。国民は絶望に沈んでゐる。

三田線は高架に出でて果てむとす辛勝も勝ち奇勝も勝利（三枝昂之）

本日、衆議院本会議で内閣不信任案は否決されたが、菅総理は退陣を表明した。我が国はだうなるのか？大震災の復興もまだまだ進んでゐないのに。被災された方々はこの政争をだう思つただらうか？

人知れず思ふ心も言はでさは露とはかなく消えぬべきかな（落窪姫）

「落窪物語」は日本のシンデレラストORYだが、落窪姫が継母にいじめられ、不幸のどん底にゐた時に掲出歌を詠んだ。愛する人を想ふ気持ちも告げられず、露のやうに消えてしまいさうな私です。しかし姫は不幸から救い出され、幸福の階段をのぼる。私たちにもこの不幸が終はる時が訪れる。必ず。

6月4・5・6日

苦しきは折りたく柴の夕煙憂き身とともに立ちや消えまし（鉢かつき）

鉢かつき姫は御伽草子の有名な話。頭から鉢がとれなくなつてしまつた姫がさまよいながら最後には貴公子に愛される。これも日本のシンデレラストORYである。しかし途中姫はお風呂番になり掲出歌を詠んだ。私たちの現在の苦しみも必ず救済される。

面白きこともなき世を面白く住みなすものは心なりけり（高杉晋作）

幕末の英雄高杉晋作の辞世の歌である。高杉晋作には長州の美男の血が流れてゐた。かすかにおかしみを感じる歌である。私たちも心の持ちやう。丸い豆腐も切りよで四角である。希望を持つて行きたい。

家もなく妻なく子なく版本なく金もなければ死にたくもなし（林子

平)

林子平は優れた学者だったが江戸幕府に弾圧され、不遇であつた。それでも死にたくないのだよ、といふつぶやきはフモウル(ユウモア)を感じさせるが、この笑いには涙が一滴したたらせてある。

6月7・8・9日

どちらかと言へば麦茶の有り難く（稲畑汀子）

今日は雨は降らなかつたがムシムシした日だつた。夏は何故麦茶なのだらう。汗と一緒に流れる栄養を補ふと言ふけれど。稲畑汀子は文豪高浜虚子の孫娘。作風は古風、伝統的。

穴子来てイカ来てタコ来てまた穴子来て次空き皿次マグロ取らむ（小池光）

あまり梅雨らしく雨が降る日が少なくて、暑い日が多い。お寿司などさつぱりしたものを食べたいが、掲出歌は面白い歌である。私は穴子から食べ始める。最後は海老と玉子である。小池光は「これなにかこれサラダ巻き面妖なりサラダ巻きパス河童巻き来よ」といふ歌もある。

パンツ脱ぐ遠き少年泳ぐのか（山口誓子）

今日も梅雨らしくない暑い日だつた。沖縄は梅雨明け。学校の体育の時間は水泳をやつてゐるのだらうか？掲出句は塚本邦雄の酷愛の句でもあつた。

6月10・11・12日

瓜ばたけいざよふ空に影まちて（河合曾良）

あまり梅雨らしくない暑い日が多いが食後メロンをいただいてゐる。
掲出句は「奥の細道」の旅の中で芭蕉の弟子、曾良が詠んだ。私は
スイカも好きだが、メロン派である。桃派、枇杷派、鳳梨派ハインアツプルでもあ
る。

泣く涙雨と降らなむ渡り川水まさりなば帰り来るがに（小野篁）

死者のため流す涙が雨になつて降つて欲しい。死後の世界に渡る川
の水があふれ、氾濫して亡き人が帰つてきたらよいのに。古代の巨
匠は妹のために歌つたが、大震災から3ヶ月、亡き人たちの魂にこ
の歌を捧げます。

いそちまり語り合ひたる妻はなしけふもむなしく梅雨の雨降る（入
江相政）

入江相政侍従（子爵）は昭和帝の側近として権力を握った大物である。しかし五十年あまり連れ添った子爵夫人に掲出歌のやうな挽歌を捧げてゐる。たとへ庶民でも変はらない普遍的な悲しみなのではないか？

6月13・14・15日

雨晴れて清く照りたるこの月夜またさらにして雲なたなびき（大伴家持）

あまりに雨が降らないのも農業などに困るし、暑くて困るが、早く梅雨入りし、あまり雨が降らない。そんな夜、雲よたなびかないで、月を隠さないで、そんな歌である。夏は夜。夜になるとホツとする。

日本は国やまこのまほろばたたなづく青垣山隠れる日本しうるはし（日本武尊）

日本はまほろば、本当に美しい国と古代の神ヤマトタケルノミコトも歌った。そんな美しい日本が私たちの愚かさで破壊されてしまった。しかしまた新しく美しく我が国を立て直さないといけない。私たち一人一人の心の中のまほろばを取り戻すのだ。

まほろばを作りましようねよく研いだ刃物と濡れた砥石の香り（東

直子)

東直子さんは現代短歌の人気ある歌い手である。その歌の中にも「まほろば」といふ言ひ回しが出てくる。私たちは必ずまほろばの日本を再建出来るといふ希望を私は持つてゐる。

6月16・17・18日

夏の野の繁みに咲ける姫百合の知らえぬ恋は苦しきものを（大伴坂上郎女）

大災害の起こった年ではあるが6月はジウウンブライドの月でもあり、恋歌を取り上げてみやうと思つた。掲出歌は夏の野の姫百合のやうに知られぬ恋は苦しいと歌ふ。しかし、恋のよろこびや輝きも感じさせる歌である。大らかな万葉時代の恋だ。

紫の色に心はあらねども深くぞ人を思ひそめつる（醍醐帝）

心は紫色ではないけれど恋の色に染められてしまった。日本の基礎を築いたといふ古代の伝説の帝王の恋歌である。大らかで何だか楽しい恋歌である。

筑波山端山繁山しげけれど思ひ入るにはさはらざりけり（源重之）

筑波山は今の茨城県の山である。周りに人里近い山や木々の茂った山があつても筑波山に行くやうにどんな障害があつても恋を成就させます。古代人はさう歌つた。私たちはどんな障害があつても必ず国家を再建する。

6月19・20・21日

どう切っても西瓜は三角にしか切れぬあと何回ぐらいの家族だろうか（永田和宏）

昨年、癌で亡くなられた巨匠河野裕子先生の夫で、京大教授でもあった永田和宏氏の歌である。西瓜を食べる家族の愛情の風景にもいつか終はりが来る。しかしだからこそその日常が尊い。今日は父の日。河野裕子先生の辞世の歌を記しておく。「手をのべてあなたとあなたにふれたきに息が足りないこの世の息が」

涙川身も浮きぬべき寝覚めかなはかなき夢のなごりばかりに（寂蓮）

東日本大震災のダメエジもまだ癒えてゐないのに、九州は大雨の被害が出てゐるやうである。雨の中、人々に思ひを馳せ、無事をお祈りする。掲出歌は恋の涙で体が流されると歌ふが、涙は恋ゆゑとは限らない。雨よ早く止むがよい。

紫陽花やはなだにかはる昨日今日（正岡子規）

「はなだ」とは青色のことである。紫陽花も、萼紫陽花も美事にはなだ色に咲いてゐる。雨の中、美しく。掲出句は正岡子規の作品の中でも最も有名な作品の一つである。

6月22・23・24日

あの夏の数限りなきそしてまたたった一つの表情をせよ（小野茂樹）

今日は夏至。掲出歌は戦後の短歌ベストテンを決めやうとしても必ず一位二位を争ふ絶唱である。あの夏、恋人はさまざまな表情を見せた。けれどそれは一つの「愛しい」表情に集約されるのである。夏の恋歌として、この歌は和歌の歴史の中で輝いてゐる。

思ひかね妹がり行けば冬の夜の川風寒み千鳥鳴くなり（紀貫之）

恋心を抑へかね愛しいあなたのところに行くとき冬の夜の川風が寒く千鳥が鳴いてゐる。季違いと言はないで欲しい。平安時代、真夏にこの歌を唱へると辺りが涼しさに包まれるといふ呪^{まじな}ひがあつた。私も今日、この歌を唱へてみた。しかし猛暑は去らなかつた。

花もてる夏樹の上をああ「時」がじいんじいんと過ぎてゆくなり（

香川進)

ちよつと田舎町に仕事に行く。車道の脇に立葵が満開になつてゐる。季節はめぐり、時は流れ、生命が輝いてゐる。夏は暑く、冬は寒い。それが自然の摂理である。それを改めて受け入れるだけだ。夏を抱きしめたい。

6月25・26・27日

手のうへにかなしくきゆる蛸かな（向井去来）

大震災から3ヶ月あまり。掲出句は芭蕉の高弟向井去来が妹の死に際して詠んだ句であるが、戦後の傑作「火垂るの墓」を彷彿とさせる。そして私は3ヶ月前亡くなられた幾万の方々のためにまた涙を流すのである。

世の中は憂き身に添へる影なれや思ひすつれど離れざりけり（源俊頼）

王朝時代の末期の芸術界のドン源俊頼の絶唱である。生きることとは苦しい人生の影、捨てやうとしても捨てられない。大ボスだった源俊頼にも何か苦しみがあつたのだらうか？私も時に煩わしさを感じてもこの生を捨てられないのである。

年ふれば齡よはひは老いぬしかはあれど君をし見ればもの思ひもなし（清少納言）

私も年をとつたのか暑さがこたへる。清少納言は掲出歌を皇后定子、その夫の一条帝に捧げた。老いてもつらくても、「君」があれば、もの思ひなし。全ての人にそんな大切な「君」がある。暑い夏も乗りきることが出来る。

6月28・29・30日

夜もすがら契りしことを忘れずば恋ひむ涙の色ぞゆかしき（皇后定子）

水無月は結婚の月とは外国の風習だが、今月は恋歌を選んできた。
一晩中約束したことをあなたが忘れなかつたなら、あなたが私を恋
うて流す涙は何色か知りたい。日本史を彩った皇后定子と一条帝の
ロマンスである。藤原定家が「百人一首」の下書き「百人秀歌」に
入れた傑作である。

夕顔や一丁残る夏豆腐（森川許六）

夏。暑い。まだ6月なのに真夏のやうである。江戸時代の人は食べ
物をいためないやう大量生産はしなかつた。一丁のお豆腐と夕顔の
花の白は響きあつてゐるのだらう。爽やかな涼しさを感じる。

水たまりにうつつた空をとびこえてアタシあなたの明日になりたい
(よみ人知らず)

掲出歌はNHKラジオで流された一般庶民の歌だが、古代の皇后の御歌にひけをとらない掛け値なしの傑作である。今日も長野県で大地震があり、節電に人々は苦しんでゐる。しかし、私たちの一人一人が誰かの「あなた」であり、「明日」であり、「希望」なのである。

7月1・2・3日

水上のこころ流れてゆく水にいとど夏越なごしの神楽おもしろみなかみ（壬生忠見）

一年の下半期が始まった。昨日は夏越しの抜ひといふ行事が西日本では多かったのではないだらうか？氷室饅頭といふ菓子を食べ、夏の健康を願ふのである。掲出歌は古代の歌と思へない軽快なリズムがある。おもしろい歌である。

夕照雨はらはら光り輪の中にわが里いれて虹たちにけり（結城哀草果）

今日は半夏生はんげしょう。夏至はの後、一定の期間がたつと農耕を休んだり、祭りを行つたり各地に半夏生習俗があるやうである。結城哀草果はアラギを代表する歌人であり、農村を歌ひ続けた。

観覧車回れよ回れ想い出は彼には一日我には一生（栗木京子）

栗木京子先生は文壇一二を争ふ絶世の美女で一日限りの恋など信じられない。虚構であらう。あるいは栗木京子先生に恋した無数の男のことを歌はれてゐるのかもしれない。しかし私にもかういふ特別な一日がたくさんある。教え子が彼女に会ひに坂道を自転車で走つていくのを見て、感慨深かつた。

7月4・5・6日

「たった今全部捨ててもいいけれどあたしぼっちの女でも好き？」

（渡邊志保）

時に全てが煩はしくなる。全てを捨てたくなる。でもそんな風に全部を捨てても私を愛してくれるか？と掲出歌は問ひかける。それはぜいたくでわがままで、でも切ない問ひかけである。誰しもが心の奥底に隠してゐる問ひかけである。

世の中はともかくても同じこと宮も藁屋も果てしなければ（蝉丸）

世の中はだうにもかうにもどこまで行つても同じである。宮殿に住む幸福も藁の小屋に住む不幸も上も下も際限はないのだから。王朝の歌人の呟きは現代に生きる私たちにも何かを語りかける。

阿字の子が阿字のふるさとたちいでてまたたち帰る阿字のふるさと

（御詠歌）

阿字とは光。そして大日如来のこと。例へ宗教を信じてゐやうとゐまいと私たちの全てが神の子、仏の子であり、大いなる命の一部であり、いつか旅を終へ、ふるさとに帰る。唱歌の「ふるさと」が描くのも私たちがいつか帰る光の世界である。弘法大師の教へである。

7月7・8・9日

恋ひ恋ひて逢ふ夜は今宵天の川霧立ちわたり明けずもあらなむ（詠
み人しらず）

恋する気持ちをたかぶらせた彦星と織り姫様が逢ふ今日は七夕様。
その夜、天の川に霧が渡つて欲しい。夜が明けないやうに。二人が
別れなくてすみますやうに。古代人の願いは優しくロマンティック
だった。

なかなか人にあらずば酒壺になりにてしかも酒に染みなむ（大伴
旅人）

金曜日の夜、先輩の先生に誘はれ、居酒屋さんに行く。私には未知
のドキドキする世界である。古代人で酒を愛し、酒を歌つた変わり
種は大伴旅人だった。旅人の歌にはほんのり悲しみがある。かえつ
て人でなければ酒壺になつて酒でいっぱいになるのだ、と。

ずいずいと悲しみくれば一匹のトンボのように本屋に入る（安藤美保）

悲しみがずいずい来ると本屋に入るとは本好きなのでもあり、現実逃避でもあるのだらう。作者自体、24歳で登山中、崖から転落して亡くなられた。さういふ悲しみを思ふ時、私もトンボのやうに本屋に入りたくなるのである。

7月10・11・12日

君がふと冷たくないかと取りてより絡ませやすき指と指なり（角倉羊子）

「もつと冷房を強くしてくれ」と言つてゐる人をよく見かける。そんなに暑くないのに。掲出歌は素直に読むと冬の歌だが冷房の強すぎる夏の電車や劇場の恋人と考へてもロマンティックだ。

いつ帰る？いつ来？いつ逢ふ？いつ別る？いつ行く？我をいつ忘るるや（小池純代）

日本語（に限らず東洋の言語）では疑問・反語・詠嘆は同型で文脈で理解する。いつ帰るのか？いつ来るのか？いつ逢ふのか？いつ別れるのか？いつ行くのか？そして最後は疑問ではなく忘れないで欲しいといふ呼びかけであり、「I LOVE YOU」の意味であり、ジャズの名曲「FLY ME TO THE MOON」と同じ趣向だ。

息あつくわれをまく腕耐えてきしかなしみをこそ抱かれたきを（沢
口芙美）

恋人に体を抱きしめられながら今まで耐へてきた悲しい心を抱いて
欲しいと願ふ歌である。しかし裏返してみるとこの歌の主人公には
抱きしめてくれる恋人がある訳で、ある意味切ない幸福が描かれて
あることに気づいた。

7月13・14・15日

炎天の野の駅はるかパナマ帽若き父なれ清きまぼろし（辺見じゅん）

辺見じゅんの父は国文学者で角川書店を創業した実業家でもある角川源義である。現在、角川源義賞は国文学界のもつとも権威ある賞になってゐる。そんな父への想ひをうたつた作品である。

白露の玉もて結へるませのうちに光さへ添ふ常夏の花（高倉院）

常夏の花とはなでしこの花のことである。白露が垣根いつぱいにおいて光輝き、その中になでしこの花が咲いてゐる。独逸にもなでしこの花が咲いてゐる。金色の花かもしれないし、銀色の花かもしれない。金色の花だとうれしいやうな気がする。

饒舌にささやきし夜の風も落ちかれの若さが厄介になる（中城ふみ子）

芥川賞最年少美少年候補者水原涼くん落選。また一から再出発。ますますの精進が必要であらう。若いのだからまだまだいくらでもチャンスがある。文学をしつかり勉強することが本道だ。期待してゐる。

7月16・17・18日

一昨年も去年も今年も一昨日も昨日も今日もわが恋ふる君（源順）

今月も恋歌を力を入れて選んでゐるが古代の人も現代人が読んでもうならされるやうな情熱的で技巧を凝らした歌を作つてゐる。掲出歌もその一つである。是非、リズム、響きを楽しんで欲しい。千年続く恋心がここにある。

水鳥の浮き寝絶えにし波の上に思ひを尽きて燃ゆる夏虫（藤原家隆）

蛩、夏の虫は恋する心の化身とされた。秘めた恋心が燃えると考へられたのである。現代、人々は恋心を隠しもせず、夏を謳歌してゐる。しかし千年前の感動は色あせない。

莊嚴のきはまるところ自ずからあふれるものは涙なりけり（平塚らいてう）

なでしこJapan優勝！女子サッカーワールドカップ。平塚らいてうにより女性の権利を向上させる運動が始まったが、21世紀の日本女性はつひに世界の頂点に立つたのである。感無量であり、自ずから涙があふれる。莊嚴がきはまつて。

7月19・20・21日

短夜やわれにはながきゆめ覚めぬ（横井也有）

原田芳雄さん逝去。大ファンだった。独特の存在感、個性。抜群の演技力。私が大好きな作品は井上ひさし原作の「父と暮らせば」や室生犀星原作の「火の魚」など。昨日、「大鹿村騒動記」観たばかりだった。「さらばぢや！」

昨日と言い今日と暮らして飛鳥川流れて速き月日なりけり（春道列樹）

今日、誕生日。34歳になった。この年になるとめでたくもなし。月日の流れの速さを感じるばかりである。今年は人類の歴史に残る事件が起きた。それでも自然の時間は人事に関係なく流れる。感無量である。

これまでに吾に食はれし鰻らは仏となりてかがよふらむか（斎藤茂吉）

今日は土用の丑の日。うなぎを食べるのが楽しみである。斎藤茂吉はうなぎが大好きで、自分が食べたうなぎは仏様になつてゐるといふ歌を詠むに至つた。私にとって茂吉は教科書に出てくる無味乾燥な偉人でなく、うなぎ好きの同士である。

7月22・23・24日

人魂で行く気散じや夏野原（葛飾北斎）

暑い日が続いてゐる。葛飾北斎は人魂になつて夏野原に涼みに行く
と歌つた。奇想天外の作品や妖怪の絵もたくさん残した北斎らしい。
最近はあまり怪談を聞かないやうな気がするがどうだろうか？

念力のゆるめば死ぬる大暑かな（村上鬼城）

今日は一年で一番暑い日。今日は大暑。念力がゆるむとは我慢する
力がゆるむといふ意味だらう。村上鬼城は耳が不自由で貧しさや死
を見つめる句を作り続けた。その作品は独特の世界を築いてゐる。

タッチアップなど分かっているのか神宮で原を観ている君のまばた
き（黒岩剛仁）

プロ野球オオルスタアゲエムは東北の球場で幕を閉じた。東北出身の選手が先発投手だった。掲出歌はずいぶん昔、原監督が選手のことの歌である。今、女の子が夢中で観てゐるのはダルビツシユや浅尾や佑ちゃんか。昔も今もミイハアである。

7月25・26・27日

いちにちをふりぬし雨の夜に入りてもやまずやみがたく人思ふなり
(藤井常世)

今年は去年に比べると雨が多いやうである。暑さは少し和らぐが、
また別の水害の心配も出てきて、とかくむつかしい世の中である。
掲出歌はその雨のやうな恋心を歌ふ。「やみがたく」といふところ
までがいはゆる序詞である。

数ならで心に身をば任せねど身に従ふは心なりけり(紫式部)

私は取るに足りないものだから心の欲望のままには生きられない。
けれどこの現実の身に合はせて変はつていくのが心なのだ。原稿用
紙何千枚もの人類の遺産を書いた女は当然、その精髓を一首の歌で
も表してゐる。絶唱である。この歌を見逃さず「千載集」に選入さ
せた俊成もすごい。

雨に弾く一途な心連弾のバツハ爆発寸前の恋（福島泰樹）

夕方、ピアノリサイタルに行く前、伏見のオウブンカフェでオランダ風クレエプの夕食。そうしたら滝のやうな夕立とものすごい雷。店の奥に逃げ込んだ。リサイタルの時間までには雨は上がった。小林愛実さんのリサイタルはバツハではなくシヨパンだった。15歳の少女、今後に期待。

7月28・29・30・31日

やがてはや国おさまりて民安く養ふ寺も立ちぞ帰らん（足利義政）

真夏、非力無才の私も忙しく働いてゐる。一人一人がさうやつて頑張ることが大震災からの復旧になるのだらうか。応仁の乱の時の將軍も国の平和を願つてこんな歌を詠んでゐた。国よ早くおさまれ。

時により過ぐれば民の嘆きなり八大龍王雨やめたまへ（源実朝）

新潟から福島にかけ歴史的豪雨が襲つてゐる。大震災の傷痕も癒えぬのに豪雨やエネルギー危機。源実朝のスケールの大きさは民のために神に語りかけるといふ桁外れのものであつた。今、そこまで純粹で器の大きな政治家がゐない。

天地あめつちのうちに一人の我ありと夢みしころの若かりしかな（尾崎行雄）

日本近代政治の父・尾崎行雄は掲出歌のやうな作品を残した文人であつた。今の政治家にそれだけの教養や知性があるのか考へるとゾオツとする。それはともかく内容も言葉も素晴らしい歌である。尾崎行雄はまさしくかけがへのない一人であつた。

我が若き思ひのすべて街を往く君を包みて夕霧となれ（加太こうじ）

若い生徒が恋心に悩んでゐる。モテすぎて彼女と他の女の子との間で揺れてゐる。ぜいたくな悩みだが、本人はちよつとアンニユイ。夕霧が包みこむのは一人ではなかつたのかもしれない。若さの輝きと影である。

8月1・2・3日

朝焼のうつくしさおわれする（種田山頭火）

8月になった。夏の朝焼けの後は天気が崩れやすい。山頭火の句にはそんなさみしさが漂つてゐる。そしてまた8月になり、立秋が近づき、夏の終はりを敏感な人ならば感じとる。と言つても若者にとつてはまだ一ヶ月夏休みである。

冷や麦の緑うす紅児に取らす（山中蛍火）

ああさうだ。冷や麦の中には何故か色つきのものがあり、父母はそれを食べさせてくれた。そんな親の愛を思い出す夏の一日。もつとも私は元気で冷たい食べ物あまり食べない。夏バテ知らずである。

海賊船に乗れば海賊夏休み（芝崎綾子）

昨日は涼しくて過ごしやすかったが、今日は暑さが盛り返した。街に元気な子供の姿が目立つ。海賊のやうに元気である。真つ黒に陽灼けしてゐる。朝は私の自宅の隣でラヂオ体操をしてゐる。夏真つ盛り。

8月4・5・6日

子を殴ちしながき一瞬天の蝉（秋元不死男）

今年はなかなか蝉が鳴かないなと思つてゐたが、今はうるさいぐらいに鳴いてゐる。仕事で春日井に行つた時など怖いぐらいだった。また電車の中には若い親と小さい子供の一家が目立つ。満員電車で苛立つ子供。疲れて不機嫌になつてゐる親。どちらの気持ちもちよつとずつ分かる。私には子供はゐないが。

朝顔が降る遠国の無人の街（金子兜太）

俳句は歌ほどの広がりを持たないのではないか？といふ私の誤解を解いてくれたのは塚本邦雄翁の「百句燦燦」であつた。俳句でも象徴詩の高みに達したものがある。文学の旅は果てがなく、私はこの先の世界にワクワクしてゐる。

広島や卵食ふ時口開ける（西東三鬼）

66回目の原爆忌。過ちは繰り返さないといふ誓ひはむなく、大震災を引き金に原子力発電所の事故が起こってしまった。西東三鬼は破壊された広島で恐怖のため沈黙し、ゆで卵を食べる時だけ口を小さく開けた。恐怖は破壊を目にしたことと放射能汚染の両方なのであらう。この句のやうなことは本当は二度とあつてはならなかった。

8月7・8・9日

夏衣きつつなれにし身なれども別るる秋の程ぞもの憂き（伊達政宗）

夏の衣のやうに慣れ親しんだそなたと別れる秋は憂はしい。伊達政宗が恋人に送った歌であり、別れは永遠の別れであつた。乱世の英雄は和歌や漢詩に通じた愛の英雄でもあつた。明日は立秋である。

露草や秋のまんまもなつかしき（泉鏡花）

立秋。掲出句は番町の先生、泉鏡花の手帳から死後見つかつた絶唱である。秋のまんまとは蓼の花のこと。立秋のころは暦は秋といつても一年で最も暑い時期である。しかし陽射しや風はだんだんと秋になり、私たちに実りや恵みをもたらす。

崩れたる石堀の下、五指ひらきぬし少年よ。しやうがないことか（竹山広）

竹山広先生は長崎原爆の被害を受けられた被爆歌人であつた。「しやうがなかつた」と暴言を吐いた政治家（といふに値しない）がいたが、原爆の被害や大震災の被害をしやうがなかつたと思つてはいけない。決して忘れることなく戒めとして、国の再建をすべきである。

8月10・11・12日

幼きは幼きどちの物語葡萄のかげに月かたぶきぬ（佐々木信綱）

立秋を過ぎたころそが暑さのピイク。夜になると一息つける。佐々木信綱は夜の一時を過ごす幼子に限りない慈しみをかけられ、一首を詠まれた。絵のやうである。暑いけれど夏は果物が美味しい。

陸奥はいづくはあれど塩釜の浦こぐ舟の綱手かなしも（よみ人しらず）

大震災から5ヶ月が経つが必ずしも復興が進んでゐない面がある。東北の人々は無事にお盆を迎えられるのだらうか。掲出歌は古今集の東歌。源実朝の百人一首の作の本歌になつた歌である。

朝寝髪われはけづらじ美しき君が手枕ふれてしものを（柿本人麻呂）

朝、起きると髪までびつしより濡れてゐて、洗はないといけない。
寝室には冷房がない。しかし柿本人麻呂は恋人がふれた髪を洗はな
いといふエロティックな歌を詠んだ。柿本人麻呂はアラギの歌人
により風景の歌ばかり称揚されたが、恋歌の名手だった。

8月13・14・15日

流燈やひとつにはかにさかのぼる（飯田蛇忽）

お盆。川に灯籠を流し、亡き人の魂を天界におくる。それが一つ急にさかのぼったといふ。感受性の強い人、文学が読める人なら、この一句の怖ろしさと悲しさに全身が粟立つであらう。蛇忽はよく死を主題に句を作った。

中国に兵なりし日の五力年をしみじみと思ふ戦争は悪だ（宮柊二）

第四句までおだやかに流れるリズムが最後、強い断定に変はる。その力強さの前では机上の空論はむなく思える。宮柊二は実際、第二次大戦に送り出された。明日、終戦（敗戦）記念日。戦争は悪だといふ思ひを忘れてはならない。

山かげを立ちのぼりゆく夕煙わが日の本のくらしなりけり（保田與

重郎)

本日は66回めの終戦（敗戦）記念日。そして大震災以後初のお盆をムシムシする中で過ごしてゐる。保田與重郎は第二次大戦前から戦中、戦後にかけて日本浪漫派を結成し、日本の伝統美と古典を追究した。戦争によりブレることなく、戦後の知識人に絶大な支持をされた。私たちも夏を、そして大震災以後の日本を生き抜いていきたい。

8月16・17・18日

卵産む海亀の背にとびのつて手榴弾のピン抜けば朝焼け（穂村弘）

穂村弘さんの歌は言葉の組み合わせ方が素晴らしい。産卵する海亀。手榴弾のピンを抜く。そして朝焼けの美しい浜辺。バラバラの材料を一首の美しい詩歌に仕立て上げる。ため息が出てしまふ。意味が分からないのに美しい光景が目を開けると広がる。それが詩歌の醍醐味だ。

裸祭りの花崎遼太乙女座の生まれ死にたいほどはづかしい（塚本邦雄）

塚本邦雄先生のあまりに華麗で、博い知識に裏付けられた詩歌を前にするとたじろいでしまふ。しかし塚本邦雄先生は掲出歌のやうな軽快で面白い歌も作ってゐる。8月も折り返したが若者たちは元気である。

もし君と結ばなければ月の出る夜にだけ咲く桔梗になろう（岡しのぶ）

岡しのぶさんが掲出歌でデビューした時はまだ十代だったと思う。あはれ深く清々しい詠み口に詩的衝撃を感じた。リズムカルで若々しい詠みっぷりだが、日本の詩歌の伝統に連なる立派な作品でありながら、幻想美も感じさせる。

8月19・20・21日

片枝さすをふの浦梨初秋になりもならずも風ぞ身にしむ（宮内卿）

今日は涼しくなり、秋の予感がする一日だった。暑い日と涼しい日が入れ替はりながら、秋へ向かつていくのだらう。それでも涼しいとホツとする。爽やかに甘い梨が実る秋がやって来る。をふの浦とは伊勢（現在の三重県）の歌枕で梨が有名だった。

夏果つる扇と秋の白露といづれかまづはおかむとすらむ（壬生忠岑）

藤原定家は百人一首の中でも壬生忠岑の歌をかつてゐた。掲出歌もそんなに有名作品ではないが、夏から秋への季節感をよく描いてゐる。夏の扇を置くのが先か、秋の白露がおくのが先か。今日も涼しく、過ごしやすい。

君はきのふ中原中也うれ梢さみし（金子明彦）

新しい生徒が一人来た。ミステリ小説が好きで、「天地明察」「神様のカルテ」など流行小説も読んでゐるが、最高の恋愛小説は「舞姫」と言つてゐた。文学好きな少年。絶滅危惧種かもしれないが、頑張れ！

9月1・2・3日

かたはらに秋草の花語るらくほろびしものはなつかしきかな（若山
牧水）

9月になつた。大震災から半年近く経つた。ほろびたものは大きく
なつかしい。そんな喪失感を抱える秋が来る。しかし同時に再生と
実りを感じる秋でもある。復興を通じて大震災前より魅力のある国
を作つていきたい。掲出歌には過ぎ去つた恋愛への想ひも滴らせて
あり、そこが心を打つ。

旅の世にまた旅寝して草枕夢のうちに夢を見るかな（慈鎮和尚）

台風が来た。名古屋に仕事のためにやつて来たが鉄道のダイヤが乱
れ、大垣に帰れない。名古屋のホテルに宿泊。旅の世の中でまた旅
寝をする。夢の世の中でまた夢を見る。明日は帰れるだらうか？

草まくら旅のやどりの露けくばはらふばかりの風も吹かなむ（藤原道長）

結局、今日も春日井のホテルに宿泊。かへつて非日常をささやかに楽しむが家に帰れない不安もある。しかし大震災の被災者の方は私よりずっと大きい苦難を味わつてらつしやる訳である。一の人、藤原道長は旅の夜、涙が流れても風が吹き飛ばしてくれるよと歌つた。明日吹く風を待つて眠る。

9月4・5・6日

塚も動け我が泣く声は秋の風（芭蕉）

台風12号により奈良、和歌山、三重一帯で多くの犠牲者が出た。
今年は何故こんなに天災が起こるのだらうか？今、我が国も歴史の
中の大きな転換点に来てゐるのかもしれない。しかし、それはそれ
として大震災や台風でお亡くなりになつた方の御冥福を祈つてゐる。

或る人より寂しき事をけふ云はれ夜寝入るまで心破れつ（鈴木金二）

私は極楽とんぼだが、それでも仕事をする中でイヤな思ひをさせら
れることもある。掲出歌もさういふ市民の日常をさりげなく切り取
つた歌である。それでも生きていくため日々過ごしていかなばなら
ない。

群雀こゑする竹にうつる日の影こそ秋の色になりぬれ（永福門院）

落ち込んだり、動揺したりすると私がすぎるのはやはり古典や文学の美しい世界のやうである。それを考えると心が安らぐ。永福門院は激動の乱世に生きられ、古典や文学をよりどころになさつた。その世界は静かな美しさに満ちてゐる。

9月7・8・9日

おほかたの秋の空だに悲しきに物思ひそふきのふけふかな（右近）

古代の人の旧暦は単純な気温ではなく、日差しや風への敏感な感覚と結びついてゐた。それは農耕と密接に結びついてゐたし、文化的行事とも結びついてゐた。秋の空のなんとないもの悲しさも日本人が受け継いできた感覚である。私もいろいろなもの思ひを抱へながら生きてゐる。

白露も夢もこの世も幻もたとへて言はば久しかりけり（和泉式部）

今日は二十四節季の白露だが、まだまだおひさまが出てゐると残暑が厳しい。これも温暖化のせいなのだらうか？和泉式部の歌ははかないものを挙げていき、それよりも私たちの恋ははかなかつたと歌ふ。ピリリと知性と皮肉が光る歌である。

菊の花若ゆばかりにそでふれて花の主に千代はゆずらむ（紫式部）

今日は9月9日。重陽の節句と言つて菊の花を飾るのだが、新暦ではまだ夏のやうで雰囲気が出ない。この日、菊の花の露を綿につけ、それで体を拭ふと不老長寿が得られるといふ信仰があつた。紫式部は土御門倫子（道長の妻）に菊を贈られ、ちよつと若返るほどふれて、不老長寿はあなた様に譲りますと歌つた。古代の人々の奥ゆかしさが偲ばれる。

9月10・11・12日

はるかなるもろこしまでも行くものは秋の寢覚めの心なりけり（大
貳三位）

古来、日本人は秋を恋心の季節と考へた。一方では秋を恋が実る季節と考へ、他方では飽きるといふ言葉をかけて、さびしさを歌った。掲出歌は後者で飽きられ、捨てられた女の恋心ははるかな中国まで行く。ましてあなたのところには届くと歌ふ。ちよつと怖い歌である。

さびしさに花月百首の歌一つ口ずさむ心に秋深みゆく（大伴道子）

秋とは言つても日中は蝉がミンミン鳴いてゐて、残暑が厳しいが、夜は秋を感じる。明日はお月見の日。大伴道子は西武財閥の総帥堤康次郎の夫人の地位と歌人としての芸術活動を両立させた。

さびしさに思ひ弱ると月見れば心の奥ぞ秋深くなる（九条良経）

今日はお月見の日。美事に満月が出てゐる。私は田舎に住んでゐるので、綺麗に見えてゐる。自然は美しく、恐ろしく、偉大で、恵みと破壊をもたらす。そのことを思ふ私の心にも秋が深くなる。九条良経の花月百首を代表する絶唱。

9月13・14・15日

都鳥沖にさりゆく夕暮れを見ており我と昔男と（馬場あき子）

和歌は短い。だからといつて簡単ではない。そこがいい。岡井隆先生は掲出歌の昔と男の間に読点をうち、これは琵琶湖辺りで詠まれた写生歌とおっしゃったが、私は違ふと思ふ。馬場あき子先生は心の中で幻の都鳥を幻の昔男と見てゐたのだと思ふ。昔男、愛の英雄、在原業平と。

君により思ひならひぬ世の中の人はいこれをや恋といふらむ（昔男）

あなたにより初めて知った。これが世の中の人が恋といふものか。面白い歌である。愛の英雄、在原業平の歌である。逢ふお姫さまごとくにこんな風に口説いてケロリとしてゐさうで面白い。古代の人が恋の季節とした秋も深みゆく。

鳴けや鳴け蓬がそまのきりぎりす過ぎゆく秋はげにぞかなしき（曾
禰好忠）

昨日、名鉄ホオルで本谷有希子さん「クレイジーハニー」鑑賞。新しい時代を切り取らうとして格闘してゐる。頑張つて欲しい。古代にもその時の「現代の価値観」と必死に闘った人はゐた。曾禰好忠が掲出歌を作った時、世人からは訳がわからないと非難殺到した。しかしきりぎりすの目線で蓬がそま（森）のやうと歌ふのは清新である。芸術家はどの時代も格闘してゐた。

9月16・17・18日

生きて仰ぐ空の高さよ赤蜻蛉（夏目漱石）

大震災から半年、合衆国のテロ戦争から十年の時が流れた。しかし私たちの皆が懸命に毎日を生きてゐる。それが復興であらうと思ふ。不思議に生き延びて仰ぐ今年の秋の空の高さと蒼さよ。私も生徒たちと生きていく。

いなびかり北よりすれば北を見る（橋本多佳子）

また台風が近づいてゐるらしい。雨や雷が激しい。しかしかへつて残暑がおさまり、少し眠つて体を休める。こここのところの残暑で疲れてゐた。残暑も困るし、台風も困る。なかなかむつかしい世の中である。

まなざしのおちゆく彼方ひらひらと蝶になりゆく母のまぼろし（寺山修司）

寺山修司・作、蜷川幸雄・演出、大竹しのぶ・主演「身毒丸」愛知県芸術劇場で観賞。能「弱法師」をオペラ、ミユウジカル風に味つけしながら、日本の家族、そして母への愛を描いた傑作である。古典を知り尽くし、学び尽くして美事に崩して、新しいものを生み出してゐる。感嘆を禁じ得ない。

9月19・20・21日

あひびきや我ら子規忌を修しゐる（加藤かけい）

古来、日本では偉大な芸術家や宗教家の亡くなつた日を忌日と称し、その人の供養、追悼と生きてゐるものたちの現世での幸福を祈つた。9月19日は正岡子規忌である。現代日本は近代の苦悩の上に成り立つてゐる。しかしその日にデエトしてゐる若者を見かけたと掲出句は歌ふ。面白い句だ。

鳥羽殿へ五六騎急ぐ野分哉（与謝蕪村）

台風12号の被害がまだ生々しいのに台風15号が近づいてきて、東海地方では100万人以上の人に避難が呼びかけられた。与謝蕪村は台風、野分をも美しく詠んだが、現実はなかなかさうもいかない。私も最低限の食糧などを買い、不安に耐えてゐる。

吹き尽くしのは草根に秋の風（加舎白雄）

東海地方では台風が去つた後、とても優しい光が空からこぼれてゐた。しかしそんな夕暮れ、首都圏は台風の直撃を受けてゐたのである。我が国にとつて試練が続く。だが台風を過ぎた後の空が澄んでゐるやうに、よりよい国が復興されるやう私も頑張つてゐる。

9月22・23・24日

明けばまた秋の半ばも過ぎぬべしかたぶく月の惜しきのみかは（藤原定家）

明日は秋分の日、定家の歌は近代以前、絶大な人気を誇った。秋の半ばが過ぎる。月が惜しいだけだらうか。恋の季節、秋に孤独なのが惜しいといふ恋心がこの歌には滴らせてある。定家本人は恋の評判は少なく、虚構の恋を歌ひ続けた。

天国のペンキ屋バケツに蹴つまづきニッポンの野山目の覚める秋（石川信夫）

本日、秋分の日。陽ざしも優しくなり、小一時間ほど田舎の道を散策する。秋の花が美事に色彩豊かに咲き乱れてゐた。紅葉はまだ早いが美しい季節が循環してゐる。穏やかな休日だった。

秋は来ぬうしろの山の葛の葉のうらさびしくもなりにけるかな（谷崎潤一郎）

生徒たちが学園祭のため今日はお休み。私には一抹の秋のさびしさがあるが若者たちにとっては恋と豊饒の秋なのだらう。谷崎潤一郎は世界で最も尊敬される日本人だが、谷崎潤一郎も繊細な美的感覚と旺盛な生命力を同居させてゐた。私もさうありたいものだ。

9月25・26・27日

女にてまたも来む世ぞ生まれまし花もなつかし月もなつかし（山川登美子）

何故だらう？この歌は秋の歌と決まってる訳ではない。しかし何故か秋になると口遊んでしまふ。山川登美子は「明星」の歌人だったが夭逝した。そのはかなく、哀しくも美しい歌が秋といふ季節と響きあふのだらうか？秋の花も、秋の月も忘じがたく存じ候。

秋風や模様のちがふ皿二つ（原石鼎）

今日はおひさまが出ておらず、ちよつと冷え込んだ。季節は確実に進んでゐる。先日、古川美術館で絵画や工芸品を観たが、そんなものもしみじみとあはれを感じる秋である。原石鼎は出雲の人で陶芸などに幼少から親しんでゐたのだらう。

曼珠沙華一むら燃えて秋陽強しそこ過ぎてゐる静かなる径（木下利^{みち}）

玄
)

今日は昨日とうつつてかわつて、朝から晴れて気温が高い。私は布団を干したり、シーツを洗ったりしてゐる。掲出歌を詠んだ木下利玄は子爵。豊臣秀吉の妻・高台院の子孫は江戸・近代と大名・華族として残った。木下利玄は東大国文で白樺派としても活躍した。

9月28・29・30日

つきぬけて天上の紺曼珠沙華（山口誓子）

近代の俳句の中で最も有名で、最もすぐれた作品の一つである。紺の秋空と真紅の曼珠沙華のコントラストが素晴らしい。今日も田舎道を一時間ぐらい歩いたが曼珠沙華も美事に咲いてゐる。穏やかな美しい季節になった。

曼珠沙華鋭き象夢^{かたち}に見しうちくだかれて秋ゆきぬべし（坪野哲久）

坪野哲久はプロレタリア歌人でありながら、貴族階級の団体「心の花」と協力し、新しい団体「日本歌人」を作った。戦後短歌の改革の源流はそこにある。しかし坪野哲久はさういふ背景抜きに忘れがたい絶唱をいくつも残した。

曼珠沙華葉をまとうなく朽ち果てぬ咲くとは命さらしきること（斎

藤史)

今月は日中はまだ暑いがさすがに朝晩は冷えてくる。この「私の折々の歌」も半年続いた。巡る季節とともにこれからも続けていきたい。掲出歌を詠んだ斎藤史は100歳近くまで現役歌人として活躍した。「日本歌人」の中心が彼女であり、塚本邦雄に強い影響を与へた。

10月1・2・3日

それながら昔にもあらぬ秋風にいとどながめをしつのおだまき（式
子内親王）

秋、しかしその秋は以前の秋と違ふと過去のことを思ひ返してしま
ふ。古代の姫宮の物思ひは何だつたのだらう。現代の私たちはまさ
に昔と違ふ秋を迎へやうとしてゐる。しかし戦後史の転換点は我が
国の精神と社会の再興のきつかけかもしれない。今日はとても穏や
か。

したしむは定家の撰りし歌の御代式子の内親王^{みこ}は古りし御姉（与謝
野晶子）

この歌は晶子の文学観を示すものとして有名である。しかしよく考
へてみると天皇の娘と自身を同列に匹敵させて歌ふ晶子はやはりた
だ者ではない。最近、私なりに近現代の短歌史をまとめやうと思つ
てゐる。

くろがねの秋の風鈴鳴りにけり（飯田蛇忽）

飯田蛇忽は近代俳句の伝統を守りながら独特の繊細な美意識を歌った。今日はその蛇忽の亡くなった日、忌日である。穏やかな秋の日だったのだと思う。蛇忽の句は秋のさみさとよく溶けあふ。「折りとりてはらりと重きすすきかな」も絶唱である。

10月4・5・6日

露ながら草葉の上は風に消えて涙にすがる袖の月かな（木下長簫子）

長簫子は秀吉の妻・高台院の兄の息子（甥）で播磨の国や若狭の国に領地を持つ大名であつたが和歌の歴史の方に大きい足跡を残した。草葉の上の露にうつつた月が消へ、涙に濡れた袖に月がうつると歌ふ。長簫子は細川幽斎や松永貞徳、小堀遠州などと文化を担つた。大河ドラマに出てこない英雄はたくさんゐる。

庭の虫はなきとまりぬる雨の夜の壁に音するきりぎりすかな（京極為兼）

今日は一日中雨が降りしきり、冷え込んだ。街を見てみると学生は一気に冬服に更衣したやうだつた。最近は夜になると秋の虫のオオケストラを聴くことが出来たが、虫たちはだうなるだらうか？雨とともに秋は深まり、思ひも深まる。

陶器すえものの白く光れる我が風呂に静かにつかる秋の夕暮れ（立原道造）

久しぶりに地元の温泉に入る。大垣は北陸に近く、寒冷なので、陶器の家風呂より、にぎやかな温泉の方がよろしい。とはいへ、今日は昨日と違って変はつて少し汗が出るぐらゐだつた。秋晴れの空は爽やかに澄んでゐた。穏やかな季節が過ぎていく。

10月7・8・9日

昼は日を夜は月をあげ大花野（鷹羽狩行）

毎日、鉄道列車で仕事に出かけるが大垣の辺りは自然が多い。土手に鮮烈に咲き誇る曼珠沙華にハツとさせられる。またすすきも幻想的に群生してゐる。そんな花野に太陽や月は巡ると歌ふ掲出句である。

空は太初の青さ妻より林檎うく（中村草田男）

月曜日は祝祭日になるので、今日から連休である。10月になり穏やかな秋らしい爽やかな日が続く。朝食の後、デザアトに林檎を食べる。味覚の秋でもある。

金剛の露ひとつぶや石の上（川端茅舎）

今日は二十四節季の寒露である。確かに朝夕はひんやりしてゐるが
日中はとても過ごしやすい。近代までの日本人は巡る自然をよく観
察してゐた。そして自然に感謝し、敬愛してゐた。

10月10・11・12日

ヨイトマケの綱ひく声す余剰の思想もたざる清く充ちしこゑ（田谷鋭）

田谷鋭の代表作であり、戦後短歌史を代表する有名な作品である。昨日、美輪明宏（旧・丸山明宏）氏の音楽会・愛にうかがった。やはり戦後を代表する名曲「ヨイトマケの唄」に涙がとめどなくあふれた。「天には星、地には花、人には愛」美輪さんのお言葉である。

てふてふひらひら薨を越えた（種田山頭火）

東日本大震災から7ヶ月。そしてまた本日は私が愛唱する種田山頭火の忌日でもある。種田山頭火もまた苦悩の生涯を送った人だった。薨を越えたてふてふとは山頭火がつかの間感じた救済の象徴だったのかもしれない。

寂寥はわがかたはらに来て坐る秋の手とさへいふべくなりて（川田

俊子)

昨日は大震災から7ヶ月と山頭火の忌日が重なつてしまつたので、山頭火の句を中心にしたが、今日は川田俊子氏の秋の挽歌を据ゑてみた。俊子夫人は文豪川田順の未亡人であり、二人の世紀のロマンスは辻井喬氏の「虹の岬」に詳しく描かれてゐる。川田順を追悼して俊子夫人が詠まれた歌だが大震災7ヶ月を悼み、捧げる。

10月13・14・15日

肌の内に白鳥を飼うこの人は押さえられしかしおりおり羽ぶく（佐
佐木幸綱）

熊川哲也氏の劇団の公演「白鳥の湖」観賞。素晴らしかった。あの
有名なチャイコフスキの曲をオケストラで聴けただけで大満足
出来た。何となく悪魔や黒鳥の方が見せ場があるやうな気がするの
だが演出によるのだらうか？もともとさうなのだらうか？何だか面
白かった。

月読は光澄みつつ外に坐せりかく思ふ我や水の如かる（北原白秋）

雨に包まれてゐる秋の日。敢へて月の秋の歌を選んだ。雨だが関定
子先生ソプラノリサイタルにうかがふ。北原白秋、西条八十、三木
露風らが作つた浪漫主義の歌曲に酔ひしれるぜいたくな秋の夜。

月読の光を持ちて帰りませ山路は栗のいがの多きに（良寛）

今日も雨の一日になりさうだが、お足もとにはお気をつけ下さいませ。掲出歌は歌僧良寛が夜道を往く人を思ひやつた歌。万葉集に本歌「月読の光に來ませあしひきの山きへなりて遠からなくに」があり、良寛の教養がうかがえる秋の歌。

10月16・17・18日

塩津山うち越え行けば我が乗れる馬そつまづく家恋ふらしも（笠金村）

古代の歌は信仰や祈りに満ちてゐた。馬がつまづくのは単なる自然現象でなく誰か（恋人や妻）が自分を思つてゐる兆しと古代人は考へ、万葉集の中にも記録した。そんな文芸の伝統の中に私たちは生きてゐる。

秋風に雲のかけはし吹き絶えて駒そつまづく家思ふかも（岡倉天心）

東洋を代表する思想家岡倉天心は万葉集の中の信仰にも通じてゐた。掲出歌は天心が中国に旅した時に詠んだもの。プロ歌人顔負けである。誰に捧げたのかは永遠の謎である。

黒髪の別れを惜しみきりぎりす枕の下にみだれ鳴くかな（待賢門院

堀河)

藝術の秋なのだらうか、今日も音楽会に行った。ピアノ、ヴィオロン、セロ、ビオラのカルテット。曲はマアラア、リスト、ブラームス。掲出歌では秋の虫が恋の音色を奏でる。黒髪がエロスを暗示する。危険な歌だ。

10月19・20・21日

灰黄の枝を広ぐる林見ゆほろびむとする愛恋ひとつ（岡井隆）

生徒に夏目漱石「こころ」を教へ、改めてハツとさせられる。生徒も「こんな面白いとは知らなかった」と驚いてゐた。私に漱石を教へて下さった小森陽一先生のことを思い出す。学問のリレーは続く。そして恋愛といふ普遍的テーマに合はせて掲出歌を選んだ。

東西南北南瓜はびこる如何にせむ（徳川夢声）

如何にせむ。だうしやう。と悩む夢声さん。何も悩むことはない。食べればよいのである。美味しくて甘い南瓜。煮つけ。天ぷら。コロツケ。プリン。今月末はハロウィンだ。

トレーラーに千個の南瓜と妻を積み霧に濡れつつ野をもどりきぬ（時田則雄）

時田則雄氏は北海道で農業を営みながら歌を詠まれてゐる。掲出歌にはおおらかで雄大な北海道の自然の豊さが感じられる。またそこに生きる人の強さと優しさも。一首はご夫人へのさりげない恋文である。

10月22・23・24日

民衆がその同朋を撃たむとしさびしきかなテレビに淡雪は降る（滝沢亘）

滝沢亘は結核に侵され、サナトリウムで短い生涯を終へた。しかし人間社会を鋭く歌った。今、ギリシアやリビア、タイなど世界各地で内戦、紛争、天災がうち続き、人類はだうなるのだらうか？民衆がその同朋を撃つ歴史を断ち切ることは出来ぬのか？雨、そして涙。

彩れる秋写さむと山峽やまかひに木葉時雨の音をききをり（奥田元宋）

古川美術館で奥田元宋画伯の優品「秋耀」拝見する。元宋画伯の画道は平坦なものでなく、努力の果てに作風を完成させた。秋の赤色を得意とされてゐる。歌人としても活躍された。美術館の中の喫茶室で栗ぜんざいをいただきました。

思ひ出づやひとめながらも山里の月と水との秋の夕暮（清原元輔）

新古今和歌集の三夕の歌は和歌の歴史の最高の到達点として有名だが、その二百年前に清少納言の父・清原元輔も負けず劣らずの佳品を仕上げてゐた。山里の月も水も澄みきつてゐる秋。その夕暮れ。初句切れは漢詩の影響で教養を感じさせる。

10月25・26・27日

朝風や水霜すべる神の杉（幸田露伴）

昨日は二十四節季の霜降だった。しかし日中はまだ夏日のやうでもある。とはいへ、シヨツピングセンターを見てゐたらクリスマスやお正月の商品を宣伝してゐて笑みがこぼれた。大動乱の一年もあと二ヶ月あまり。

秋来ては幾日になりぬ夕月夜ふけゆく空に影残るまで（九条良平）

秋の日々も過ぎゆく。九条良平は天才歌人九条良経の弟。良平の歌も相当上手い。秋の夕べの月の光に季節感を味わつてゐる。日中はまだ夏日みたいになる日もあるが朝夕はひんやりしてゐる。

あかあかと一本の道通りたりたまきはる我が命なりけり（斎藤茂吉）

火曜日に丸谷才一氏が文化勲章受賞。昨日は北杜夫さんの訃報。言ふまでもないが北杜夫さんは掲出歌の斎藤茂吉の次男。丸谷才一氏は斎藤茂吉を厳しく批判してきたが同じ山形県出身である。さうやっていろんな人間模様があることこそ文学の、生きることの醍醐味だらう。

10月28・29・30・31日

秋毎に来る雁がねは白雲の旅の空にや世を過ぐすらむ（凡河内身恒）

古代の人々は秋に雁が訪れ、春に雁が帰ることに季節感を感じた。そこには鳥といふ生き物を神秘と見なす信仰や、雁が恋文を届けるといふ伝説などもまつわりつき、豊かな世界観を築き上げてゐるのだらう。現代、雁を見かけるのも難しい。

身のうさは人しも告げじあふ坂の夕つげ鳥よ秋も暮れぬと（宮木）

上田秋成「雨月物語」の中の「浅茅が宿」のヒロイン宮木の歌である。戦乱の時代、都に旅立つた夫を想ひ、秋も暮れてしまふが逢ひたさはつのであることを旅する鳥に告げて欲しいと願ふ。私たちも21世紀の乱世、大切な人を想ひ、生きてゐる。

柿紅葉貼りつく天の瑠璃深し（瀧春一）

叔母が柿を作つてゐて熟したのを持つてきてくれる。梨と柿は私の地元・大垣の名物であり、私の好物だ。桜や柿の木は葉も秋になると美しく色づく。それを桜紅葉、柿紅葉などと呼ぶ。日本語の何といふ美しさ。

白露にぬれふす萩のみだれ髪さし込む月もその根本まで（永井荷風）

昨日は一日中雨だった。永井荷風の歌は白露に濡れる萩を歌いながら、かすかにエロティックな香りが漂う佳品である。一年も残り二か月か。冬は厳しいが冬の美しさもある。

11月1・2・3日

麓さへ熱くぞありける富士の山嶺の思ひの燃ゆる時には（元良親王）

世界的ピアニスト熊本マリ先生のリサイタルにうかがふ。シヨパンや世界のフォルクロレを楽しむがアンコオル、フアリヤ「火祭りの踊り」は圧巻のパワフルなテクニックだった。日本の愛の英雄も燃える恋心を歌つてゐる。

ヴァンルウシュ
赤葡萄酒飲めば酔うかな身のうちに天鷲絨ヒロオドがいま敷きつめらるる（松平盟子）

仕事などの都合で名古屋駅前のホテルに宿泊。寝酒に飲んだ赤葡萄酒が甘くて美味しかった。ホテルのサアビスも親切。11月になつてもムシムシして暑く変な気象だが、皆さまお気をおつけ下さい。掲出歌は華麗でエロティック。

世の中は夢かうつつかうつつとも夢とも知らず有りて無ければ（小野小町）

世界的舞踊家シルヴィ・ギエムが東日本大震災のチャリティのため緊急来日し、被災地を含む全国で公演。文化の日の名古屋公演にかがふ。愛と哀しみのボレロにとめどなく涙があふれる。私は歌の心を逆手にとり現世に夢を見たのだ。現世でも夢を見ることが出来る。

11月4・5・6日

君待つと吾が恋をれば我が宿のすだれ動かし秋風の吹く（額田女王）

日中と朝夕の気温に差があるせいから少し体調を崩す。風邪薬を服用しながら生徒を教室で待つ。なかなか万葉のやうな優雅な秋とはいかない。掲出歌は万葉歌の中でも最も有名で人気のある一つであらう。

秋の雨しづかに午前をはりけり（日野草城）

病臥。午前中、久しぶりに病院に行く。調剤を待つ間、病院の北の空き地を歩いたらすすきが美事にそいでゐた。秋桜も帰り道に揺れてゐた。帰宅後は終日横になる。窓の外、静かに秋の時間が流れる。

世は色に衰へぞゆく天人の愁ひやくだる秋の夕暮れ（心敬）

昨日から静かに雨が降り出した。今日は小康を得て、午前中仕事に出かける。明後日は立冬。暦の上では冬。静かに降る雨は天人の愁ひか？波乱の年の秋も終わらうとしてゐる。

11月7・8・9日

秋惜しみをれば遥かに町の音（楠本憲吉）

俳句では立冬が近づくのを「秋惜しむ」「行く秋」「冬隣」などと表現する。しかし現代の冬はかへつて行事なども多く、賑やかで活気のある感じなどもする。街も華やぐ。もうクリスマスツリーが飾られてゐるところが多い。

夢に舞ふ能美しや冬籠（松本たかし）

今日は立冬。掲出句は私の酷愛の句である。能の美しさを言葉で描く美しさ。静と動の美しさ。冬は厳しくもあるが、美しさもある。楽しい行事も多い。もつともまだしばらくは秋らしい日が続く。

もろともに冬幾たびを籠もりつつきみこそもつと知りたきひとり（今野寿美）

瑞々しい恋心が歌はれてゐる。幾たびも冬と一緒に過すごしても相手のことを知りたいといふ若々しい恋心があせないと歌つてゐる。寒い季節も人のぬくもりが一番あたたかい。

11月10・11・12日

おでん屋に同じ淋しさおなじ唄（岡本眸）

立冬を過ぎて急に寒くなってきた。最近、春と秋は慌ただしく過ぎてしまふやうな気がする。それはそれとして冬は豊かな味覚、あたたかな食事も美味しい時期である。私が好きなおでんはゆでたまご。

限りあればけふ脱ぎ捨てつ藤衣果てなきものは涙なりけり（藤原道信）

大震災から八ヶ月。昨日からしとしと雨が降つてゐる。晩秋、初冬の光景。掲出歌では藤衣、喪服を着る期間は終はつても悲しみには終はりがないと歌ふ。日本国内は混乱を極めてゐる霜月。

口なしの一しほ染のうす紅葉いはでの山はさぞしぐるらむ（藤原為家）

日本国内の情勢は混沌としてゐるが、今日は穏やかな天気になった。古代の王朝の人は木々が紅葉するのは時雨に染められるからと考へた。東北は紅葉を通り越して冬に入つていく。被災地に思ひを馳せる。

11月13・14・15日

下京の夜のしづもり空也の忌（森澄雄）

今日は平安王朝時代の聖者・空也の忌日。空也は苦しむ民衆に救ひの手をさしのばした。現代日本社会の人々も混迷の中、救ひを求めてゐるやうに見える。しかし冬も夜もいつか終はり、光がさす。

杜甫李白西行芭蕉秋千載（よみ人知らず）

掲出句は読売新聞に何年か前に載つてゐた作品であるが、四人の文豪を上手く織り込んでゐて美事だ。文芸の歴史は千載であり、自然の循環は永遠。穏やかな小春日にそのことを思ふ。

花嫁を見上げて七五三の子よ（大串章）

面白い句だ。七五三のお参りと神前結婚式が重なったのか？花嫁御寮を見上げるのはませた男の子なのか？憧れを抱く女の子なのか？今日、七五三の日。全国の神社に笑顔があふれる。

11月16・17・18日

かよひこし枕に虫の声たえて嵐に秋の暮ぞきこゆる（嘉陽門院越前）

ああ、季節はああといふ間にうつろつてしまふ。一昨日の夜に冷え込み、風邪がぶり返す。昨日は暖房を入れ、病臥してゐた。気がつけば、虫も鳴いてゐない。秋の暮れ、初冬を感じる。一年ももうすぐ終はる。

み山よりおちくる水のいろ見てぞ秋は限りと思ひ知りぬる（藤原興風）

一昨日から厚地のシャツを着て、暖房のスイッチも入れた。昨日は冬用の上着を着て、仕事に出かけた。冬が近い。掲出歌では山から流れてくる水に散つたもみぢが混じつてゐて秋の終はりを感じたと歌ふ。

山おろしに散るもみぢ葉やつもるらむ谷のかけひの音よわるなり（
鴨長明）

今日も季節の変はり目の歌。谷にかけてある樋に、散つたもみぢが
つもり、流れる水の音が弱ると歌ふ。その音に冬の訪れを感じると
いふ繊細な歌。日本人は聴覚でも季節を感じてきた。

11月19・20・21日

あやまてる愛などありや冬の夜に白く濁れるオリーブの油（黒田淑子）

あやまつた愛などあるのだらうか？いやないはずだ。しかし。そんな心の揺らぎ、葛藤が伝はつてくる。白く濁るオリーブの油は揺れる恋心を表してゐるのだらう。冬を代表する恋歌。

ひそみ来て誰が打つ鐘ぞ小夜更けて仏も夢に入り給ふころ（会津八一）

明日（11月21日）は会津八一の忌日である。会津八一は近代文学の激動の歴史の中で独特の美意識を持ち、独立独歩の地位を築き上げた巨匠だった。大和、奈良を愛し、仏教的価値観に根ざした秀作を残した。

波郷忌や波郷好みの爛つけて（鈴木真砂女）

今日（11月21日）は実は会津八一だけでなく石田波郷の忌日でもあり、大御所二人の配列に苦心した。鈴木真砂女さんは俳人としての活躍の傍ら、銀座でバアを経営し続けた。波郷が好きだった感じにお酒を爛するといふ。粹を感じる。

11月22・23・24日

近松をまつりし小菊のこりけり（水原秋櫻子）

昨日は知人の劇団の名古屋市民芸術祭参加作品「フラワーズ」小泉八雲」観賞。夜の都会はズウンと寒くなり、冬になったとひしひし感じる。今日は日本文学史の巨人近松門左衛門の忌日である。

暮れて聴く枯れ葉に雨の一葉忌（千代田葛彦）

勤労感謝の日。そして二十四節季の小雪が重なつてゐる今日。実は樋口一葉の忌日でもある。昔の文豪たちにとつて厳しい季節だったのだなと思ふ。一年もあと少し一日一日を大切に。

何といふ淋しきところ宇治の冬（星野立子）

昨日は勤労感謝の日で名古屋駅や繁華街・栄は人であふれてゐた。
デパートにはクリスマスの飾り。現代の冬は楽しい季節であるやう
だ。しかし京都、宇治のやうな風情のあるところ、自然の美しいと
ころに遊んでみたい。

11月25・26・27日

朝まだきちまたをつつむ秋の霧道ゆく人の姿消えゆく（三島由紀夫）

今日は憂国忌。三島由紀夫の忌日である。三島由紀夫は辞世「散るをいとふ世にも人にもさきがけて散るこそ花と吹く小夜嵐」「益荒男がたばさむ太刀の鞘鳴りに幾とせ耐へし今日の初霜」が有名だが、掲出歌は十歳の時の作品である。生きて欲しかった。

露は霜水は氷にとぢられて宿借りわぶる冬の夜の月（二条院讃岐）

二条院讃岐は源平合戦の群雄の一人、源頼政の娘である。父親も武家歌人として名高いが二条院讃岐は日本史上有数の女流歌人であり、源頼政も少し報はれたのではないだらうか？掲出歌は冬、月がうつる水が凍ると歌ふ。

陸奥の金をば恋ひて掘る間なく妹がなまりの忘れぬ頃（源頼政）
みちのく いも

東北のことを忘れていないだらうか？さう己を戒める。源氏の武将
頼政は豪快で男らしい恋を歌った。みちのくは黄金が出る豊かな土
地だが、それ以上に素晴らしいのは優しい人々のなまり。それが忘
れられず、恋しい、と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2576s/>

私の折々の歌

2011年11月26日17時53分発行